

と く
徳

ほ う
朋

二つの海

ふじはら ちかこ
藤原 千佳子

ふじはら ちかこ

1942—現在

三重県出身。

真宗大谷派浄秀寺前坊守

流罪るざいになられてからの親鸞聖人の書物には、たくさん海のたとえが出てきます。「煩惱海ぼんのうかい」「生死しょうじの苦海くかい」というわれわれの在り様ようを表す海のたとえと、「功德大宝海くどくだいほうかい」「大信海だいしんかい」「一乗いちじょう海かい」という、仏さまのおこころを表す海のたとえと、二とおりのたとえです。なぜ「生死しょうじの苦海くかい」と「功德大宝海くどくだいほうかい」と、二つあるのか。そう思いました時、私はあるお婆ちゃんとの出会いを思い出しました。「生死しょうじの苦海くかい」が「功德大宝海くどくだいほうかい」に転じてくださる、そういうおはたらきにあ遇われている方でした。(中略) その方はこう話されていました。「私はね、仏法のお話を聞いたり、お参りをするのはあんまり好きじゃなかったんです。お参りしたって何か家計の足しになるわけではなしに、仏法聞いても病気になる時はなるし、悪い事が起こる時は起こる」。仏法もわれわれの物差しで測るとそうなります。ところがこの方は、「今思うと、二十歳で亡くなっていった長男。二歳の子を残して亡くなっていった次男の嫁さん。その二人が、お参りすることの大嫌いなこの私を仏さまの前に引っぱり出してくれました。どうしても聞いてほしいと、亡き二人が諸仏しよぶつとなってこの私を仏さまの前に出して下さったのです。本当に今の私があるのは、あの二人のおかげなのです」と、涙ぐんで話されたのです。苦界くかいが大宝海だいほうかいに転じられた明るい世界を知らせて下さった方でした。

悲しいこと、苦しいことに出会わないようにしようというのがわれわれの願いです。ですから宗教のほとんどは、向こうに対象があって、「病気にならないように、ひどい目にあわないように、どうぞよろしく」と、こちらから向こうへ願いかけをします。しかし、親鸞聖人の教えをいただくと、真実の方からこのわれわれに呼び掛けて下さる。お念仏申していても病気になる時はなる。ですが、ご縁があって病気になったら病気の身を生きよと、一人ひとりの、一人（いちにん）の身の事実^{まじ}にまでな^まってくださって、^{きび}厳しいけれどどうかその身を生きよ、と呼びかけてくださる。（中略）誰でもない私一人に、どうか生まれたからには、「本当に私に生まれさせてもらってよかった。いろいろと^{きび}厳しいことはあるけれど、本当に私は私でよかったです。本当に^{とうと}尊^{とうと}かった、ありがとう」と言えるいのちに出^で遇^あえ出^で遇^あえと、私たちに呼びかけて下さっているのです。私の祖父も祖母も父も母も今ではみんな亡くなりました。しかし亡くなったなら終わりかという^とそうではなく、今も亡き人から限りなく呼びかけられています。姿こそ目に見えないけれど、私が生きている限りは私の中に生き続け、いつもいつも呼び続けて下さっているのです。

（『仏さまのよびかけ』）



仏法の救いとは状況が変わっていく事ではありません。自身の業を背負って歩む覚悟をいただくという事ではないかと思えます。救いと苦しみとが表裏一体の教えが仏法です。



この「徳用^{とくほう}」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。